

# スポーツ指導者としての教師

## ——マンガに見る現代の教師像——

山 田 浩 之

### 1 問題の所在

1960年代から70年代にかけて放映された青春ドラマシリーズと呼ばれるテレビ番組では、生徒とともにスポーツに熱中する教師が主人公として描かれていた。つまり1970年代までのテレビドラマでは学校スポーツが主要なテーマとして扱われ、しかもそれが教師と強く結びついていた。しかし1980年代に入るとテレビドラマの中の教師像は大きく変化する。「スクールウォーズ」の例はあるにしても、その他の大多数の教師を主人公にしたドラマは1979年に放映が開始された金八先生に象徴されるようにスポーツとの関係を失っていく。そして1990年代になると教師とスポーツを強く結びつけたテレビドラマはほとんどなくなってしまった。

ところがマンガでは少し状況が異なっている。マンガの中には教師とスポーツがほぼ一貫して描かれている。スポーツは早い時期からマンガの主要なテーマであり、現在も数多くのスポーツマンガが発表されている。また読者が青少年であることから、スポーツの舞台が学校の部活動であることも多い。したがって学校が舞台であれば、教師が重要な役割を担うスポーツマンガも必然的に多くなるはずである。ところがスポーツマンガでの教師の描かれ方はマンガによって、あるいは時代によって大きく異なっている。学校の部活動を舞台としながらも、まったく教師が描かれていないマンガも少なくない。

このようなスポーツマンガと教師との関係は、読者である青少年の教師像を

反映したものだと考えられよう。マンガの中での教師の描かれ方、あるいは学校が舞台であっても教師が現れないことは、現実の学校での教師と生徒の関係を象徴している。マンガに描かれた教師とスポーツの関係の変化をさぐることによって現実の青少年が持つ教師像の変化が明らかにできるのではないだろうか。そこで本稿ではスポーツマンガに現れる教師を検討し、その教師像がどのように変化してきたのかを明らかにする。そのことによりマンガの読者である青少年がいかに教師を捉えてきたのかを考察しよう!

## 2 熱血スポーツマンガの中の教師

1960年代はいわゆる熱血スポーツマンガの時代といえるだろう。この時期には梶原一騎作品に代表される数多くのスポーツマンガが発表され、その中には現在も読み継がれているものが少なくない。こうした熱血スポーツマンガの舞台となったのは、日本のスポーツ指導の状況を反映して主に学校の部活動であった。ところが部活動を舞台にしているにもかかわらず、大半のスポーツマンガで教師がまったく描かれていない。つまりほとんどの作品で指導者がいないか、教師以外の者が指導者になるという設定になっている。

指導者がいない例としては、ちばあきお『キャプテン』(1972)があげられよう。この物語は野球の名門中学である青葉学院で補欠だった谷口タカオが無名校の墨谷二中に転校したところからはじまる。名門中学でレギュラーだったと誤解された谷口は、実力とのギャップを埋めるために猛練習を行う。その努力が実って実力をつけた谷口は上級生の引退後、キャプテンに指名される。

谷口が転校した墨谷二中の野球部は生徒によって自主的に運営されている。その中心になるのがキャプテンであり、練習の指示、後輩の指導方法、ミーティングなどすべてがキャプテンの決断によって行われる。また試合ではキャプテンが選手を選び、選手交代や戦術の指示もすべてキャプテンによって行われる。最初の主人公であった谷口が引退した後は丸井、イガラシと毎年キャプテンは変わるが、キャプテンを中心に野球部が運営されていることは変わらな

い。歴代のキャプテンが野球部の人間関係に揉まれ、あるいは選手選考などの重責に耐えながら人間的に成長していく姿が『キャプテン』では描かれている。

指導者が教師ではない典型例は梶原一騎の一連の作品であろう。梶原一騎作・永島慎二画『柔道一直線』（1967）の指導者は車周作という柔道家であって教師ではない。主人公の一条直也は、中学校、高校で柔道部に在籍するが、その学校の部長や監督の指導は受けていない。車の生き様に魅せられた一条が、命がけで弟子入りし、車の柔道を受け継ぐための指導を受けている。指導者である車は「柔よく剛を制す」を実践するために厳しい修行をし、かつては鬼車と恐れられるほどの柔道家であった。しかし、彼が修行の末に編み出した必殺技はある柔道家の命を奪ってしまった。車はその償いのためにどんぞこの生活を送り、マムシの粉末を押し売りするなどして稼いだ小銭を丸井の遺族に送金していたのだった。主人公はそうした車の指導によって一流の柔道家に成長していく。

梶原一騎作・川崎のぼる画『巨人の星』（1966）で主人公星飛雄馬に野球を教えるのは、その父一徹である。一徹は、飛雄馬の幼少期より、極端なスパルタ式で「巨人の星」をつかむプロ野球選手になるための教育を行ってきた。「大リーグボール養成ギブス」に象徴される一徹の厳しさは、数多くのパロディを生み出すほどのインパクトを与えたものであった。この一徹は、巨人軍史上最大の三塁手になることを期待されるほどの天才的な選手であったが、太平洋戦争での徴兵、肩の故障など運の悪さが重なって、一度も公式戦に出場することなく引退したのであった。

さらに梶原一騎が高森朝雄の名で発表した『あしたのジョー』（画：ちばてつや 1968）では、主人公であるジョーこと矢吹丈は連載当初は15歳という設定であり、「生まれてこのかた学校ってものにぜんぜんかよったことがなかった」（1巻、172頁）と、まさに学校とは全く無縁の世界で生きている。そしてジョーの素質を見出した指導者の丹下段平は矢吹が流れ着いたドヤ街の住人であり、現役時代に日本タイトル挑戦の間際に目を痛めて引退したなど数々の

挫折を味わっていた。

梶原一騎以外のスポーツマンガでも指導者は教師ではない。少女マンガでも山本鈴美香『エースをねらえ!』(1973)の指導者は県立西高校に新しく赴任してきた宗方仁であり、この宗方によって主人公岡ひろみの才能が見いだされる。この宗方の職業についての詳細な記述はなされていない。しかし、彼は庭球協会から派遣された専属のコーチという設定であり、間違いなく教師ではない。

また1980年代初めに連載が開始された高橋陽一『キャプテン翼』(1981)では、南葛小に転校してきた大空翼を指導するのは、元ブラジルナショナルチームの一員である日系三世のロベルト・本郷である。網膜剥離でサッカーを続けられなくなった彼は翼のサッカーセンスを見抜き、南葛小サッカークラブの監督を買って出る。もちろん彼は南葛小とは何の関係もない。

このように1960年代以後に発表された熱血スポーツマンガでは、たとえ学校の部活動が舞台になっていても、教師は重要な役割を担っていない場合が多い。部活動の指導者として現れるのは、学外のスポーツ経験者であって教師ではない。物語の主人公である生徒は学外の指導者の助言を受け、そしてその指導者を目標としながら、自身の孤独な努力と根性で技術を磨いている。

スポーツマンガに現れる指導者が教師ではないことは、部活動が基本的には教師から離れた生徒たちの自律的な営みによって運営されていたことを示している。つまり部活動は勉強やしつけといった学校が本来持っている知識の伝達という機能の裏側に位置していた。知識の伝達の側面が教師の世界だとすれば、その裏側の部活動は生徒の世界であったことになる。すなわち部活動は生徒にとって重要なサブカルチャーであった。たとえ勉強で落ちこぼれたとしても、部活動ではヒーローになりえる。たとえヒーローになれなかったとしても、友人たちと楽しくスポーツに打ち込むことができる。このような部活動は学校内に作られた生徒だけの世界であった。したがって教師にはその世界に介入してもらいたくないと生徒は考えていた。こうした生徒の気持ちが熱血スポ

ーツマンガに現れて、マンガの中から教師が姿を消すことになったのだろう。

さらに熱血スポーツマンガに現れる「コーチ」や「監督」と呼ばれる指導者像からも、生徒にとっての部活動の意味が推測できよう。先に例示した梶原作品などに見られるように、それぞれのマンガの指導者は物語の中心となる競技の達人や元プロスポーツ選手が何らかの挫折を体験して野に下っているという設定になっていることが多い。指導者たちは生徒と同じ世界で育った者であり、生徒の「先輩」、すなわち目標となる人物であった。つまり、かつて自分と同じ世界を共有した「先輩」こそが、生徒にとって重要な存在になりえた。そしてその「先輩」に成り代わって主人公がスポーツ界の頂点を目指すのである。したがって物語はすべて「生徒側の世界」で展開され、決して「教師側の世界」とは重なりあわなかった。

### 3 教師マンガの中のスポーツ

#### (1) スポーツの魅力

前節で明らかにしたように1960年代から70年代の熱血スポーツマンガの多くに教師は現れていない。しかし同時期の教師を主人公としたマンガでは、スポーツは非常に重要な要素として使われていた。初期教師マンガの主人公教師はスポーツ万能であることが多く、何らかのスポーツで達人的な能力を持っていた。

このことを貝塚ひろし『わんぱく先生』（1964）で見てみよう。この物語の主人公である二階堂哲太郎は大学卒業後も歴史学を学び続けていた秀才である。また不正を許さず、生徒を救うためにはどんな苦難にも立ち向かう熱血教師でもある。この主人公教師はスポーツでも卓抜した能力を発揮する。二階堂は柔道4段であり、スポーツ万能の生徒を「そうとうなうでまえ」とうならせる。さらに野球部の部長を任された二階堂は自分に従わない生徒を納得させるため、初めて経験する野球で生徒と勝負をすることになる。二階堂はバットの持ち方すら知らなかったのだが、結局はホームランを打ってしまう。

このわんぱく先生には柔道、野球、水泳などさまざまなスポーツが使われている。そして主人公教師はスポーツを通じて生徒の抱える問題を解決することが多い。とくに教師が問題児を救い出すために積極的に利用したのは野球であった。つまりこの物語では、教師を生徒にとっての理想的な姿にするために、すなわち教師の理想化には主人公教師が持つスポーツ能力の高さが何よりも欠かせない属性だったのである。

こうした主人公教師のスポーツ能力の高さは1970年代になっても基本的に同じであった。望月あきら『ゆうひが丘の総理大臣』(1977)、灘しげみ『出席をとります』(1972)でも、主人公たちは柔道の達人という設定になっている。

『ゆうひが丘の総理大臣』の主人公である大岩雄二郎は数々の教師にはあるまじき行動をとるが、それにもかかわらず生徒から慕われている。この大岩の魅力は学歴の高さと型破りな行動にあるのだが、それとともに柔道の強さもいくつかのエピソードを形成する重要な要素となっている。大岩はかつて「中高生からはあこがれのマト!!東西大学の幻のスーパースターと言われた人」

(第5巻)で、日米親善試合の決勝に出場するアメリカ人と知己であるほどの柔道家である(第13巻)。

また「かわいい笑顔にミニスカート」で現れる『出席をとります』の主人公沢木リツコも柔道3段である。リツコが対立する生徒を仲直りさせたのは、柔道で生徒を投げ飛ばしてしまったのがきっかけであった。そしてこのエピソードによってリツコは生徒の信頼を集めるようになる。

このように1970年代の教師マンガでも、スポーツは主人公教師を理想化する重要な属性であった。ただしこの時期の教師マンガではスポーツの重要性は大きく低下していたといえるだろう。このことは同時期の他の教師マンガを見るとよくわかる。上に引いた教師マンガ以外ではスポーツは教師の魅力を生み出す要素としては使われていない。たとえば、もりたじゅん『キャー!先生』の主人公は、上のリツコと同じミニスカート姿であるし、金子節子『オッス!Gパン先生』では、主人公がタイトル通り教師らしくないジーパンで現れる。

これらのマンガでは主人公の教師らしくない服装と行動こそが教師を理想化していたといえよう。

## (2) 制度化されるスポーツ

さらに1980年代以後、教師マンガの流れは教師の不良化、つまり教師が不良文化を身につける方向へと向かう。1970年代に発表された教師マンガの主人公が身につけていた教師らしくない風貌は、不良という明確な姿に形を変えた。教師が理想化される要素として、もっとも重要になったのは不良文化であった<sup>2)</sup>。

マンガの中の教師が完全に不良化し、不良のまま教壇に立つようになると、スポーツは重要性を失ってしまう。つまり、教師が不良という強烈な反学校文化を身につけてしまうと、教師がスポーツ能力で卓越している必要もなくなってしまった。

水穂しゅうし『はいすくーる仁義』(1989)の主人公安芸情二は地獄のキューピーという通り名を持つヤクザであった。それがたまたま教員免許を持っていたため組長の命で教師となり学校の内外で抗争を繰り広げる。だから安芸は喧嘩には非常に強いがスポーツの能力はそれほど高くない。だが体操のオリンピック候補であるスポーツ万能な山下春吉という物理の教師が現れると、安芸はスポーツで対決せざるをえなくなる。正面から勝負を挑めば安芸の負けは目に見えているため、結局は姑息な手段を用いてだまし討ちをしようとする。つまり安芸はある意味スポーツの対極を示すことでマンガの主人公としての魅力を付与されている。

藤沢とおる『GTO』(1997)の主人公教師、元暴走族の鬼塚英吉もとくにスポーツに傑出しているわけではない。この物語に現れる生徒は放課後にはカラオケに行ったり、ビデオゲームに興じたりはするが、部活動のシーンはほとんど描かれていない。したがって鬼塚と生徒が健全にスポーツをすることはなく、鬼塚のスポーツ能力の高さがことさら強調されることもない。時に鬼塚は

超人的な体力を見せることがあるが、それはギャグ的なものであり、彼のスポーツ能力の高さを示しているわけではないだろう。

このように1970年代以降、教師マンガでのスポーツの役割は次第に重要ではなくなり、そして教師が不良化するとともに消滅してしまう。このことから次の二点が考えられよう。第一点は生徒にとっての理想的教師像の変遷である。生徒が感情移入できる教師、つまり生徒にとっての理想の教師とは、教師集団と生徒集団の対立の中で生徒集団に近い属性を持ったマージナルな教師であろう<sup>3)</sup>。そのように教師をマージナルな存在にさせる属性は時代によって変化している。

1960年代に主人公教師を他の教師から差異化していたのは、スポーツ能力の高さであった。先にも指摘したようにスポーツや部活動は生徒側の世界であった。したがって教師を主人公とし、しかも生徒と親密な関係を築かせるためには主人公を生徒側に踏み込ませるスポーツ能力の高さが必要だった。しかし次第にスポーツはそうした意味を失ってしまう。主人公を教師から差異化させる属性は、1970年代の教師らしくない服装や行動、そして1980年代以後の反学校文化、つまり不良化へと変遷し、スポーツ能力の高さからは主人公教師を差異化する力が消失してしまう。

このことは最近の不良教師マンガに現れるスポーツ万能教師が、むしろ熱血教師のパロディとして扱われていることからわかる。『はいすくーる仁義』の山下はスポーツ万能の熱血教師である。しかし彼は他の教師と同じ「学校側」の人間にすぎず、不登校を続ける反抗的な生徒の心を開くのは不良文化を極めた安芸情二である（5巻）。また『GTO』の体育教師である袋田も口先では熱血教師的なことを言うが、女子生徒をいやらしい目つきで見つめ、主人公の鬼塚英吉や生徒たちと対立する「学校側」の人間にすぎない。

第二点としてあげられるのはこのような教師像の変化とともに部活動の役割も変化していることである。1960年代の『わんぱく先生』で主人公が部活動を中心に活躍し、そしてスポーツ万能という属性を付与されていたのは、先に



指摘したように部活動が生徒側の世界だったからである。つまりこの時期には部活動はサブカルチャーの象徴として受け止められていた。

しかしその後クラブ活動の必修化などにもとまない部活動も学校のカリキュラムとして次第に制度化されていく。その結果、部活動は学校側、教師側の文化に取り込まれ、サブカルチャー的性格を失ってしまった。こうして生徒は学校内で居場所を失い、教師の世界に対抗できるのは不良文化だけになってしまった。このような学校の状況が教師マンガの主人公の性格付けに現れているのではないだろうか。次章ではこのような部活動の役割の変化と教師の関係を中心に検討しよう。

## 4 指導者教師の登場

### (1) 部活動における教師の役割

1980年代以後、部活動がサブカルチャー的性格を失うことにより、スポーツマンガに現れる指導者像にも大きな変化が生じた。つまりスポーツマンガの指導者として教師が頻繁に現れ、しかもその教師が部活動や生徒に多大な影響を与えるようになったのである。

このような教師を描いた代表的な作品として八神ひろき『DEAR BOYS』（1989）があげられよう。この物語の舞台となる瑞穂高校の男子バスケットボール部は教師への暴力事件で活動中止となり、廃部寸前であった。そこにバスケットボールの名門校から哀川和彦が転校してくる。彼の明るい性格により荒れていたバスケットボール部員たちも立ち直り、再びインターハイを目指して活動をはじめめる。

このバスケットボール部を指導するのが、氷室恭子という英語教師である。彼女は本来女子バスケットボール部の顧問であったが、哀川に触発されて男子部の指導も行うようになる。メンバーが最小の5人しかおらず、しかもさまざまな問題を起こしていたため氷室以外の教師は男子バスケットボール部をまったく信用していなかった。それでも男子バスケットボール部が存続できたの

は、指導者である氷室の力によるものであった。

また河合克敏『帯をギュッとね!』(1989)でも柔道部を指導するのは女性の数学教師である倉田龍子である。倉田は柔道には門外漢であるが、適切な助言によって柔道部を支えることになる。さらに許斐剛『テニスの王子様』(2000)でも数学教師の竜崎スミレが指導者になっている。実質的な中学校のテニス部の運営は生徒にまかされているが、それを竜崎が見守り、そして時には厳しく指導するのである。

このように1980年代以後は、教師が指導者としてスポーツマンガの中に現れ、しかもその存在が重要な位置を占めるようになっていく。これは前節の終わりで指摘したように学校でのスポーツ指導、そして部活動がカリキュラムとして制度化されてきたことによるのだろう。さらにそのことにより教師がスポーツ指導者として主人公になることも可能となった。以下では主人公としてスポーツを指導する教師が描かれたマンガを概観してみよう。

## (2) 不良教師とスポーツ

スポーツ指導者としての教師を描いたマンガの特徴は指導にあたる教師が必ずしもスポーツの経験者ではないことであろう。しかも初期のスポーツ指導者を描いたマンガでは、教師と不良文化が密接に結びついている場合が多い。

その代表的な作品が所十三『仰げば尊し!』(1987)である。この物語は主人公教師である日向大がヒロインである女性教師如月舞の入浴シーンを覗くところからはじまる。日向は会議の場でもサングラスをはずすことがなく、生徒や他の教師とも平然と喧嘩をする。つまり日向は不良教師であった。この日向が「不良どもの巣窟」として廃部寸前であった野球部の部長兼監督となる。当初、野球部の不良たちは日向を受け入れられず、両者は激しく対立する。しかし野球部主将との一対一の喧嘩に勝った日向は、「俺を甲子園につれてけ」の言葉とともに彼の指導の元で練習することを野球部員に納得させる。その後も日向は部員が巻き込まれた数々の問題を体を張って解決するとともに、部員た

ちの不良としてのメンツも立てながら甲子園予選を勝ち抜いていく。

この日向の考え方がもっともよく表れているのが、野球部員が準々決勝の試合を放棄してしまった時の対応であろう。部員が試合を放棄したのは、ヤクザに暴行された女子生徒を救うためであった。日向は一人でヤクザに立ち向かおうとするが、試合を放棄してその場に駆けつけてきた部員に窮地を救われる。日向は集まった部員を咎めることなく、部員の一人と暴行事件の首謀者とを一对一で戦うように仕向けるのである。つまり日向にとって重要なのはスポーツの試合ではなく、生徒の友情であり、さらには不良としてのサブカルチャーであった。

このように『揚げば尊し!』は不良教師マンガとスポーツマンガが足しあわされたものであったといつてよい。そこで不良文化とスポーツが天秤にかけられた時、より重要なのは不良文化だったことになる。教師が指導者として介入しても、生徒にとって重要なものは反学校文化をより強く表した不良としてのアイデンティティであった。

また教師が部活動に介入するためには、その教師が他の普通の教師とは異なる属性を身につけていなければならない。この物語ではその属性が不良であった。しかも主人公の日向は不良部員のリーダー的な存在として描かれている。このことを強調するために「学校側」の教師が必要とされる。その役割は教頭に割り振られており、教頭は問題が生じるたびに野球部を廃部に追い込み、日向の責任を問おうとする。こうした教頭の存在により、日向は他の教師たちとは異なる存在であることが強調され、しかも日向が不良文化を身につけていることで教師と生徒の距離が縮められている。

しかし生徒にとっては日向の不良文化だけでは十分ではなかった。日向が不良部員のリーダーたりえるのは、主将やヤクザを叩きのめす喧嘩の強さゆえだった。喧嘩の強さがあってはじめて日向は不良部員からの信頼を得ることができたのである。

こうした構図は『揚げば尊し!』とほぼ同時期に連載がはじまった、くじら

いいくこ『マドンナ』(1987)にも共通している。『マドンナ』の主人公、土門真子は女子大英文科を卒業して牛鍋工業高校に赴任する。彼女は「教師って残業ないし、夏休み 冬休みはたっぷりあるし、遊べるし……」(1巻9頁)という安易な意識で教壇に立つが、担任クラスの生徒はほとんどが不良であった。生徒からの度重なる嫌がらせを受けながらも耐え抜いた彼女は、ある事情からラグビー部の部長を押しつけられてしまう。初めは運動部の部長など嫌でたまらなかった真子だが、次第にラグビー部の指導にのめりこんでいく。

そこにヤクザまがいの取り立て屋をしていた不破明がコーチとして就任する。不破はラグビー部の強化を名目に校長が勝手に選任したコーチであった。不破はランニングばかりの一方的な指導を押しつけるため、ラグビー部員は強く反発する。しかし不破が伝説の名選手であり、しかもかつて花園での全国大会の決勝で暴力事件を起こした事情などが明らかになると、部員は不破に信頼を寄せ、花園出場という目標を共有するようになる。

この物語ではコーチである不破明に不良という属性が与えられている。しかし不破は不良文化を持っているだけでは指導者として認められない。不破が学校から押しつけられたコーチという存在から抜け出し、部員の信頼を得るには、一つは往年の天才ラガーであったこと、もう一つは過去に暴力事件を起こしたという負い目が付加されなければならなかった。

さらにこの物語の主要な舞台である学校は基本的にラグビー部と主人公の真子、そして不破コーチに対して寛容である。つまり学校自体が反学校文化をある程度許容することで部活動を学校側の文化に取り込んだといえよう。不良の吹きだまりのようだった学校が真子を中心としたラグビー部の活動で正常化するのである。しかしそうした中でも生徒の世界は頑なに守られる。それを象徴しているのが極めつけの不良である醍醐の存在である。主人公教師の真子は、ラグビーによってなんとか醍醐を更生させたいと願うが、醍醐は真子のたび重なる働きかけにも耳を貸そうとしない。そればかりか自分の領域に入り込んできた彼女に暴行まで働こうとする。それでも真子の熱意によって醍醐はラグビ

一に興味を示しはじめるが、結局、ラグビー部の活動に十分参加することなく中途半端な形で物語が終わってしまう。つまり醍醐は生徒の中に残った反学校文化の象徴であり、その存在はすでに学校には不良の居場所が無くなってしまったことを表している。

### (3) 主人公としての教師

以上のように1980年代終わりのスポーツマンガは不良文化と大きく結びついていて、つまりこの時期までは、部活動と不良文化の両者が反学校文化の象徴になりえたことになる。しかしその後スポーツ指導者としての教師からは不良臭さが抜けてしまう。その典型といえる原秀則『やったろうじゃん!!』(1991)は主人公教師が甲子園大会優勝を目指して野球の指導をするというまさに正統派の野球マンガであった。

この作品の主人公である喜多条順は創部3年目にして県大会ベスト8という実績を残した私立校野球部の監督兼教師になる。「甲子園へ行くため」にランニングなどボールを使わない練習ばかり強要する喜多条に野球部員は不信を抱く。しかし喜多条が甲子園の優勝投手であることがわかり、そしてランニングによって確実に野球の能力が向上していることに気づくと部員は次第に心を開きはじめる。また部員を指導する過程で喜多条自身もかつて暴力事件を起こしたことや、勝つことしか考えない非人間的野球部で受けた心の傷から立ち直る。

この物語で重要な点は喜多条が赴任するまで部員はほぼ自主的な練習を行っていたという点にある。そこに野球部を甲子園大会に出場させるという学校の経営戦略のために喜多条が招かれたのである。つまり部員にとって喜多条は学校側の人間であり、生徒側に侵入してきた異物であった。喜多条に部員たちが強く反発するのは練習方法に対する不満だけでなく、それまでの「楽しくやって」「満足してしまっ」(1巻, 15頁)いた野球が、喜多条によって管理された、勝つための野球になってしまったからであった。

そうした喜多条に部員が心を開くためには、次のような三つの条件が必要であった。第一には喜多条の過去の実績である。偶然に喜多条が甲子園大会の優勝投手であったことを知り、その甲子園での感激を伝えられた野球部の主将は、喜多条の練習方法を積極的に受け入れようとする。また他の部員も喜多条の実績を知ることで信頼を寄せるようになる。

第二の条件は喜多条の過去の問題行動であった。彼は前任校で部員を殴るという暴力事件を起こして解雇されていた。そのことが理事長などに知られたため、次の予選で甲子園に行けなければ即刻解雇されることになってしまう。こうした喜多条の過去は部員に動揺を与える。しかし暴力事件の事情と学校が喜多条を辞めさせようとしていることがわかると、部員は喜多条に対する信頼をさらに強めることになる。つまりこの事件を通して喜多条は学校側の人間ではなくなったのである。

喜多条の実績と負い目により部員は一つにまとまった。そしてそこに第三の条件である喜多条の管理主義的指導との決別が加えられる。就任当初の喜多条は部員に有無を言わず自分の練習方法を押しつける。それは喜多条自身が経験した甲子園常連校の管理主義的指導に近いものであった。厳しい指導こそが強くなるためにもっとも効果的だと考えていた喜多条だが、同時に管理主義に対する大きな疑問も持っていた。それは喜多条自身が管理主義による厳しい競争とそれによる人間関係の破綻で深く傷ついてきたからであった。喜多条は野球部の指導を通して人間的に成長することで、自身の問題を克服し、管理主義野球に正面から対峙するようになる。そうして管理主義の対極を行くことで野球部を強くしようとするのである。

こうした条件が満たされると部員は進んで喜多条の練習方法に従い、本気で甲子園を目指すようになる。それに従って部員たちのライフスタイルにも変化が生じてくる。かつては練習後、ラーメンを食べながら喜多条の悪口を言い、時に駅前のカラオケボックスでうっぶん晴らしをするのが部員たちの日常であった。しかし喜多条の厳しい練習に従うようになると、喜多条に反抗的で

あった部員まで帰宅後も練習するようになる。こうして部員の生活は野球部の活動へと収斂し、サブカルチャーとしての反学校文化を示す場所はなくなってしまふ。ただし喜多条が学校側と対立しているという設定により、野球部の活動はかろうじて生徒の世界内に踏みとどまっているといえよう。

こうした生徒のサブカルチャーは森田まさのり『Rookies』（1998）ではさらに極端なものとなっている。この物語では野球部員のほとんどが不良として描かれている。

『Rookies』の主人公、川藤幸一は二子玉川学園高校に転任してきた現代国語の教師である。彼の信条は「夢を持ち夢をつらぬく事の大切さを忘れない」（1巻、28頁）であり、生徒にも「夢」を持って欲しいと願う。そして彼はその願いを直接生徒にぶつけ、体を張った情熱で行動する。つまり彼は「今時おマヌで熱い70年代ティーチャーだよね」（1巻、134頁）と生徒から揶揄されるほどの熱血教師である。しかし彼は前任校で暴力事件を起こしていた。注意した生徒がスパナで殴りかかってきたため、その生徒を殴り、重傷を負わせてしまったのである。

一方、二子玉川学園高校の野球部は、試合中の暴力事件で活動中止になっていた。そのため甲子園を目指そうとしていた上級生は去り、不良である1年生だけが残っていた。不良部員はテレビ、ビデオ、ビデオゲーム機やピンボールなどを部室に持ち込み、放課後や授業をさぼった時のたまり場として利用していた。

川藤が二子玉川学園高校に採用されたのは、不良集団である野球部を排除しようとする校長の思惑からであった。校長は川藤と野球部員を対立させて暴力事件を起こさせ、それを口実にして野球部を廃部にしようと画策していた。そして川藤は校長の思惑通り野球部の部長となり部員と対立する。しかし不良ばかりだった野球部員は校長が野球部と川藤を排除しようとしていることを知ったことをきっかけにして川藤に心を開くようになる。その後、川藤は情熱を持って部員を一人一人説得し、時には体を張って野球部に引き戻す。そして甲

子園大会出場を目標に野球部は活動を再開する。

この物語は生徒のサブカルチャーと部活動の関係を明瞭に示している。サブカルチャーの象徴であったのはガラクタが詰め込まれた野球部の部室であり、そこは不良部員にとって「快適」な空間であった。川藤が野球部再開のため最初に行ったのは、この部室の掃除である。たまり場になっていた部室が整理されると、不良部員は学校での居場所を失ってしまう。川藤はそうした不良部員を説得して野球部に引き戻すのである。

また学校と主人公教師、そして野球部員の対立も明確である。もともと川藤は野球部を排除するために採用されている。つまり生徒にとって川藤は学校側の人間である。したがって川藤が学校側の教師ではないことがわかるまで生徒は決して心を開かない。それは例えば不良部員を1ヶ月以内に更生させて野球部に戻さないと川藤は解雇されると聞かされた際の不良たちの反応に描かれている。不良部員は川藤の情熱は自己保身のためだと判断して川藤に強く反発する。そんな不良部員に対しても川藤は情熱をぶつけ続け、サッカーをやりたいという彼らの冗談にも真面目に応えようとする。そうしてようやく不良たちは川藤の情熱が本物だと知り、少しずつ心を開くようになる(3巻)。

以上、1980年代以後に教師が主人公として現れたスポーツマンガを概観してきた。こうしたマンガに現れた教師に特徴的なのは、必ずしも主人公教師がスポーツで優れた実績をあげている必要がないということであろう。上にあげたマンガでは、『やったろうじゃん!!』の主人公が甲子園での優勝投手という傑出した実績と能力を持っているだけであった。かつての教師マンガの主人公とは属性が大きく変化したことになる。

1980年代以後に教師がスポーツ指導者として主人公になるためには、教師のスポーツ能力よりもそれ以外の点で主人公教師が他の教師と差異化される必要がある。それを象徴しているのが過去の暴力事件や教師の不良文化であった。教師が不良という反学校文化を持っていれば、それだけで通常の教師とは差異化される。しかし不良教師ではない『やったろうじゃん!!』の喜多条や



『Rookies』の川藤は、過去の暴力事件やそれによる解雇の可能性によって初めて通常の教師から切り離されることになった。これらの負い目を持つことにより、マンガの主人公たちは教師の世界からはみ出したマージナルな存在となり得る。こうしてマンガの中の教師は生徒の世界に近づくのである。

もうひとつの主人公教師を差異化する条件は、管理主義的指導の否定である。管理主義的指導は部活動において教師が強い権力を持つことを意味している。教師が練習計画を立て、基礎から応用まで指導し、試合では細かな指示を与えるのが管理主義であろう。つまりそれは生徒の世界であったはずの部活動が教師に支配されることに他ならない。そこでは勉強と同じように、生徒は教師の指示に従わざるを得ない。主人公教師が管理主義を否定し、生徒の自主性を尊重することで、部活動という生徒の世界がある程度守られることになる。したがってたとえ教師が主人公となっても、あるいは教師が主人公だからこそ、明確に管理主義を否定する必要があるのだろう。その否定によって主人公教師は他の教師から差異化され生徒からの信頼を得ることができる<sup>4)</sup>。

## 5 教師と生徒の距離

本論文ではスポーツマンガに現れた教師像の分析を行ってきた。生徒と教師という二項対立を強調しすぎた部分もあるかもしれないが、マンガという生徒の視点から見た教師と部活動の関係をある程度は描き出せたのではないだろうか。最後に本分析の知見をもとに現実の学校の状況との関連を検討しておきたい。

第一点は教師と生徒の距離についてである。とくに最近の教師が主人公になるマンガでは学校と生徒の対立関係が明確に見られる。そうした中で教師が指導者となるには、主人公を他の教師から差異化するなんらかの属性が必要とされる。つまり教師は不良であるか、過去の暴力事件などで負い目を持っているという設定になる。こうした負の属性を持っていない限り教師が生徒の世界に入ることはできない。

つまりこのことは読者である青少年の内的世界においても教師との間に明確な距離が存在していることを示している。本分析中で示したような生徒集団と教師集団との対立を、少なくとも生徒は感じ取っているのであろう。つまり生徒の内的世界では、教師は学校側に位置する生徒とは異なる社会集団でしかない。したがってたんに従来の実績や技術などが優れているだけでは、教師は生徒の世界に入ることができない。現実の教師はこのような生徒との距離を十分にふまえて生徒に対処する必要があるだろう。

第二点として部活動が持つ意味の変化について見ておこう。本分析で明らかにしたように部活動はかつて持っていた反学校文化的性格を失い、学校側、教師側の文化に取り込まれようとしている。つまり部活動が制度化されることで、スポーツは学業に近いものになってしまった。このことを現実の世界でも示しているのが大学入試であろう。

現在、スポーツ推薦は指定校、一般公募などの制度を問わず推薦入試では一般的になっている。その結果たとえ全国大会には出場できなくとも、ある程度の成績をあげれば大学入学の要件を満たすようになってしまった。いわばスポーツでの入試は偏差値が大きく下がり、誰もがこの制度を利用する機会を持つようになったのである。

それにとまってスポーツの試合が持つ意味も大きく変化した。試合はたんに強さを競う場ではなく、日頃の学校教育で行われる修練の結果をテストされる場になっている。その結果がインターハイベスト8や県大会ベスト4などという実績で示されるのであり、そしてそれが大学進学のための資格に直結する。つまりスポーツの試合は入試と同じ意味を持つようになってしまった。こうして部活動はサブカルチャーとしての性格を失い、授業と同様に教師の指導下におかれるようになった。

だからといって学校でのスポーツ指導を否定することはできない。もちろん学校での教師によるスポーツなどの部活動についての適切な指導は重要である。ただ部活動での過剰な指導によって学校での生徒の世界が奪われ、さらに

は部活動が教師による生徒の一方的な評価の場になってしまう可能性を忘れてはならないだろう。

### 注

- 1) マンガに現れた教師像を検討する意義については、山田浩之「少女マンガに見る現代の教師像」『松山大学論集』第13巻第3号、2000年を参照されたい。
- 2) 不良教師マンガの登場については、山田浩之「マンガの『熱血教師』はどこへ消えたのかー子供が教師に求める二律背反的な願い」『論座』1999年6月号、朝日新聞社、1999年を参照されたい。
- 3) 山田「マンガの『熱血教師』はどこへ消えたのか」(前掲)を参照されたい。
- 4) なおこのことは教師が主人公のマンガに限らず、最近のスポーツマンガ全般に言えることでもある。『SLAM DUNK』でも、主人公の所属する湘北高校バスケットボール部の指導はキャプテンによって行われていた。監督がほとんど口出しすることではなく、部の運営はほとんど生徒の自主性に任されていたことになる。しかしライバル校は大きく異なっている。細かい指示を出して試合を有利に導き、また優秀な選手を育て上げたのもすべて監督の手腕なのである。つまりライバル校の多くでは管理主義的な指導が行われていたことになるだろう。主人公の学校がこうした管理主義の対極をいくことで、読者である青少年も感情移入が容易であったと推測される。
- 5) 『マドンナ』や『やっтарろうじゃん!!』には部員の推薦入試についてのエピソードが描かれている。これらのエピソードも部活動が学校側の文化に取り込まれていることを示しているのかもしれない。

### 引用マンガの一覧

- 井上雄彦『SLAM DUNKースラムダンク』(全31巻)、集英社(ジャンプ・コミックス)、1991年(連載開始:1990年)。
- 貝塚ひろし『わんぱく先生』(全3巻)、サン出版(コミックペット)、1981年(連載開始:1965年)。
- 金子節子『オッス! Gパン先生』(全2巻)、集英社(りぼんマスコットコミックス)、1979年(連載開始:1978年)。
- 梶原一騎原作、川崎のぼる画『巨人の星』(全11巻)、講談社(KCスペシャル)、1989年(連載開始:1966年)。
- 梶原一騎原作、永島慎二画『柔道一直線』(全8巻)、光文社(光文社文庫 COMIC SERIES)、1998年(連載開始:1967年)。
- くじらいいくこ『マドンナ』(全18巻)、小学館(ビッグコミックスピリッツコミック

ス), 1987年(連載開始:1987年)。

許斐剛『テニスの王子様』(既刊13巻), 集英社, 2000年(連載開始:2000年)。

高橋陽一『キャプテン翼』(全21巻), 集英社(集英社文庫), 1997年(連載開始:1981年)。

ちばあきお『キャプテン』(全15巻), 集英社(集英社文庫), 1995年(連載開始:1972年)。

高森朝雄原作, ちばてつや画『あしたのジョー(ちばてつや全集)』(全16巻), 講談社(講談社コミックスデラックス), 1993年(連載開始:1968年)。

所十三『揚げば尊し!』(全6巻), 講談社(講談社コミックス), 1987年(連載開始:1986年)。

灘しげみ『出席をとります』(全3巻), ひばり書房(ヒットコミックス), 1979年(連載開始:1972年)。

原秀則『やったろうじゃん!!』(全19巻), 小学館(ビッグコミックスピリッツコミックス), 1991年(連載開始:1991年)。

藤沢とおる『GTO』(全25巻), 講談社(少年マガジンコミックス), 1997年(連載開始:1997年)。

水穂しゅうし『はいすくーる仁義』(全14巻), 集英社(ヤングジャンプコミックス), 1989年(連載開始:1989年)。

望月あきら『ゆうひが丘の総理大臣』(全22巻), 秋田書店(少年チャンピオンコミックス), 1977年(連載開始:1977年)。

もりたじゅん『キャー!先生』(全2巻), 集英社(りぼんマスコットコミックス), 1971年(連載開始:1970年)。

森田まさのり『ROOKIES』(既刊19巻), 集英社(ジャンプ・コミックス), 1998年(連載開始:1998年)。

八神ひろき『DEAR BOYS』(全23巻) 講談社(講談社コミックス月マ), 1989年(連載開始:1989)。

山本鈴美香『エースをねらえ!』(全18巻), 集英社(マーガレット・コミックス), 1973年(連載開始:1973年)。

附記 本稿は平成13年度松山大学特別助成の成果である。記して感謝の意を表したい。